

降誕節第1主日礼拝説教「闇夜に輝く星を見る」予稿

日本基督教団石神井教会 2024年12月29日

【旧約聖書日課】イザヤ書 60章1～6節

- 1 起きよ、光を放て。
あなたを照らす光は昇り
主の栄光はあなたの上に輝く。
- 2 見よ、闇は地を覆い
暗黒が国々を包んでいる。
しかし、あなたの上には主が輝き出で
主の栄光があなたの上に現れる。
- 3 国々はあなたを照らす光に向かい
王たちは射出出でるその輝きに向かって歩む。
- 4 目を上げて、見渡すがよい。
みな集い、あなたのもとに来る。
息子たちは遠くから
娘たちは抱かれて、進んで来る。
- 5 そのとき、あなたは恐れつつも喜びに輝き
おののきつつも心は晴れやかになる。
海からの宝があなたに送られ
国々の富はあなたのもとに集まる。
- 6 らくだの大群
ミディアンとエファの若いらくだが
あなたのもとに押し寄せる。
シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えて来る。
こうして、主の栄誉が宣べ伝えられる。

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 3章2～12節

²あなたがたのために神がわたしに恵みをお与えになった次第について、あなたがたは聞いたにちがいません。³初めに手短かに書いたように、秘められた計画が啓示によってわたしに知らされました。⁴あなたがたは、それを読めば、キリストによって実現されるこの計画を、わたしがどのように理解しているかが分かると思います。⁵この計画は、キリスト以前の時代には人の子らに知らされていませんでしたが、今や“霊”によって、キリストの聖なる使徒たちや預言者たちに啓示されました。⁶すなわち、異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたちと一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者となるということです。⁷神は、その力を働かせてわたしに恵みを賜り、この福音に仕える者としてくださいました。⁸この恵みは、聖なる者たちすべての中で最もつまらない者であるわたしに与えられました。わたしは、この恵みにより、キリストの計り知れない富について、異邦人に福音を告げ知らせており、⁹すべてのものをお造りになった神の内に世の初めから隠されていた秘められた計画が、どのように実現されるのかを、すべての人々に説き明かしています。¹⁰こうして、いろいろの働きをする神の知恵は、今や教会によって、天上の支配や権威に知らされるようになったのですが、¹¹これは、神がわたしたちの主キリスト・イエスによって実現された永遠の計画に沿うものです。¹²わたしたちは主キリストに結ばれており、キリストに対する信仰により、確信をもって、大胆に神に近づくことができます。

【福音書日課】 マタイによる福音書 2章1～12節

1イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

6『ユダの地、ベツレヘムよ、

お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さいものではない。

お前から指導者が現れ、
わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

7そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

幼子イエスの家【こども説教のために】

先週クリスマスを祝った教会は、「降誕のロウソク」を灯しながら年末年始を過ごします。御子ご降誕の祝いは続いているのです。今日も、わたしたちは、お生まれになられた幼子を見ようとして、ここに集まりました。幼子イエスを一目見ようと探し訪ねてくるすべての人をお迎えするために、わたしたちのクリスマスの祝いは続けられるのです。

はるばる東方から幼子を拝もうとして旅をしてきたのは、**占星術の学者たち**です。彼らは、星に導かれて「**王としてお生まれになった方**」を訪ねてきたのです。初めは、エルサレムの王宮を訪ねました。「王としてお生まれになった方」にふさわしいのは王宮だと考えたのです。けれども、そこに「幼子」は見つかりませんでした。「預言書」は「ベツレヘム」を指し示していました。学者たちがベツレヘムを目指した旅を続けると、**星が先立って進み**、幼子のいる家まで彼らを導いてくれたのです。家の中で母マリアと共にいらした幼子を見つけると、彼らは、ひれ伏して拝み、献げものをしました。

占星術の学者たちのように、王としてお生まれの幼子を探し訪ねて旅を続ける人たちが、今もいることでしょう。教会は、幼子イエスと共にいた母マリアのように、今日も、これからも、幼子と共にいる家であり続けるのです。

あなたを照らす光

今年も、クリスマスを迎えた後の年末の礼拝で、東方の占星術の学者たちが幼子を礼拝したという物語を聞いています。伝統的な西方教会の教会暦では、1月6日「公現日（エピファニー）」に聞いてきた物語です。

この物語を、わたしたちは飽きるほど聞いてきました。毎年、ご降誕の祝いの中で、幾度この物語を耳にするでしょうか。にもかかわらず、一連の降誕物語の一部としても聞くこの物語を敢えて取り出して、毎年特別な日を設けてまで繰り返し聞き直すようにと、教会の先達は定めてきたのです。

東方の**占星術の学者たち**。彼らは、ひとつの「星」を見つけました。幾百とある星々の中から、ひとつの星を見つけ、その星を手がかりにして、彼らは旅を始めました。その星が、「**ユダヤ人の王としてお生まれになった方**」を指し示していると信じたからです。

ある人たちは、この学者たちのことを、「三人の王」と呼びます。異国の王たちが、「星」を頼りに、「**ユダヤ人の王としてお生まれになった方**」を探し訪ねた、というのです。彼らは友好国に新しい王子、しかも王の後継となる皇太子が誕生したことを祝いにやってきた、ということでしょうか。それにしても、訪ねた先のユダヤの王宮、エルサレムは、不穏な反応です。「**どこにおられますか**」と尋ねても、都エルサレムで王子の誕生が祝われている様子はないのです。王宮のヘロデ王は、彼らと呼び寄せると、律法学者たちの示した預言者の言葉を示して告げます、「**行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう**」。そう言って、王は彼らをベツレヘムへ送り出しました。そこは、かつてダビデ王が生まれ育った町でした。学者たち、「三人の王」は、そこで一人の幼子を、見出したのです、「**ユダヤ人の王としてお生まれになった方**」を。

だれもがクリスマスを祝うわたしたちの国にあっても、多くの人が「キリスト教は外国の宗教だ」と言います。「日本人には合わない」と言うのです。確かに、主イエスは、ユダヤ人でした。ユダヤ教徒として生まれ、生き、弟子たちと共に活動し、死んで行かれたのです。決して新しい宗教を創設したわけではありませんでしたし、ユダヤ人であることをやめて「国際人」になることを主張されたわけでもありません。この方が偉大な方だとしても、「ユダヤ人の王」と呼ばれるような生まれであられたことに変わりありません。

けれども、この「**ユダヤ人の王としてお生まれになった方**」を、異国の学者たちは訪ね、拝み、贈り物を献げました。この方が、自分たちを照らす光となられると信じたからです。彼らだけではありません。すべてのユダヤ人ではない異国の者が、この幼子として生まれた方を、自分たちを照らしてくれる光として見出したのです。その光を、わたしたちも見ています。

みな集い、あなたのもとに

わたしたちは、主イエスを、「ユダヤ人だから」という理由で信じ、従うわけではありません。「ユダヤ人の王としてお生まれになられた方」であるにもかかわらず、主イエスを信じ、このお方に従うのです。それは、このお方が、「ユダヤ人」である前に、「幼子」としてお生まれになられた方だからです。

母と共にいるしかない幼子、母の胸に抱かれるしかない幼子に、いったい何ができるでしょうか。その幼子が、何を為し得るでしょうか。その幼子は、何者でしょうか。

何者でもないのです。何者でもない者として生まれたばかりの幼子のいる家を、「星」は指し示しました。幼子の前にひれ伏すようにと、幼子を拝むようにと、自分の宝の箱を開けて、幼子に贈り物をするようにと、「星」は指し示しました。

星は、幼子の家の上にとどまって光るのです。それを学者たちが見出したのは、彼らが暗闇の中で目を上げたからです。

昼日中、星々は見えません。ガラガラとしたこの世の現実を目を奪われているとき、目を上げて、わたしたちは、激しく射し込む太陽の光に眩み、目を開けていられないでしょう。しかし、夜の暗闇が訪れたときに目を上げるならば、そこに星々を見出すのです。夜の暗闇の下でも、この世の現実是不変かもしれないかもしれません。むしろ、夜の闇の中でこそ、この世の現実の暗闇がはっきりと立ち現れてくることもあるでしょう。しかし、その暗闇の中でしか、星々を見出すことはできません。暗闇の中でこそ、ひとつの希望の星は見出されるのです。

それは、希望の光を放つ星です。希望の光を指し示す星です。この地上の現実に絶望している者たちに希望を与えてくれる光を指し示す星です。

預言者は、希望を語りました。「**みな集い、あなたのもとに来る。息子たちは遠くから、娘たちは抱かれて、進んで来る。**」

分かたれた人と人が、民と民が、国と国が、ひとつに集い、共に歩むものとされていく希望です。母が幼子と共にいるように、幼子のもとに家族が共にいるように、共にいることを貴いとされるようになる希望です。

わたしたちは、この希望を捨てていないのです。諦めていないのです。そうであればこそ、世界中の教会は、今日も、「幼子と共にいる家」となるのです。東からも西からも、南からも北からも、皆をお迎えするためです。

幼子として迎えられることを良しとされたお方、主イエスが、わたしたちと共にいてくださいます。幼子と共にいるようにと導いてくださいます。わたしたちも、ここに迎えられたのです。ここに向けられたわたしたちは、ここにお迎えするはずのすべての人と共に、生きていくのです。